



報告 2021年正義と平和全国会議「コロナの時代と教会」 (2021年3月19日、20日オンライン)

今年の全国会議は、コロナウイルス感染回避のためにオンライン二日間の開催となりましたが、例年通り70人ほどの参加があり、いつもと違う本音トークがおもしろかったと好評でした。コロナの中に置かれた様々な当事者たちの声に耳を傾け、今後の活動の方向性を小グループに分かれて考えました。参加者の声をご紹介します。

「貧困の現場」と「労働問題」

今回、貧困の現場の課題で「可視化」ができたのは全国会議の大事な成果だと思います。「性的虐待の件、カトリック教会の原罪みたいなところになっている」との発言もあったように、ハラスメントの問題や女性の尊厳への対応が後手後手になっていること、そしてコロナ禍

の中、様々な活動制限はあるものの、貧困の現場（例えば、職を奪われ収入を絶たれた人々や「ステイホーム」の場所すらない人々がいる現場）に寄り添う事について、とりくみが不十分であることが明らかになったと思います。

また、労働問題は正義と平和協議会ではあまり取り上げられてきませんでした。今回、

ネットワークミーティングの一つとして組むことができました。いま日本では、エッセンシャルワーカーなど多くの女性や若者が低賃金で不安定な雇用に置かれ、格差は広がる一方です。海外では、所得格差の是正をめざして最低賃金を改善するなど賃金の底上げを図る動きが顕著ですが、日本では、世界にもまれな地域（都道府県）別に格差がつけられた最低賃金制度となっていて、しかも最高額の東京ですら時給千円ちょっとという低額に抑え込まれています。全労連（全国労働組合総合連合）傘下の全国各地の労働組合がとりくんだ最低生計費試算調査によると、憲法に謳われた「健康で文化的な最低限度の生活」を営むためには全国どこでも時給1,500円は必要との結果が出ています。これから、賃金やハラスメントといった労働問題に対して正義と平和協議会がどのようなメッセージを出していくことができるのか、一緒に考えていきたいと思います。

（鳥巢雄樹 長崎教区信徒）

「移住者、外国人労働者の現状」

「反貧困ネットワーク」の路上生活者への緊急支援や「移住者と連帯する全国ネットワーク」（移住連）と共に行った支援活動や、「移民や難民の家族に在留資格を認めよ」の運動、カトリック難民移住移動者委員会の「ベトナム人技能実習生ホットライン」の活動、昨年2月の「北海道緊急事態宣言」下の、北海道における外国人支援についての報告があった。

コロナ禍の北海道における外国人支援から見てきたものは、①留学生が、観光地北海道・札幌を支えている事。②外国人労働力ありきの日本経済。③困窮のとらえ方は人それぞれ。それぞれに合った支援が必要なのである。

発表者の西千津さん（札幌教区正義と平和協議会）は、「皆さんの教会にも沢山の外国人がいます。彼らに声を掛けたことがありますか？教会の隣人としてお話したことがありますか？」と問いかけ、報告を終えた。

「入管難民法」改正や、外国人信徒とともに

作る小教区の在り方などなど、様々な課題に対して大きな示唆を与えてくれる報告でした。

（山口雄司 札幌教区信徒）

「教育現場」

東星学園の長谷部準子教頭より、コロナ禍における学校現場の報告がありました。昨年2月末の突然の安倍宣言後の休校、オンラインによる授業開始、そして生徒の登校再開。学校が始まれば、部活や学校行事をどのようにするか、事あるごとに決断を迫られ、ようやく一年が終わろうとしているということでした。東星学園の事例は、おそらく多くの学校がこのコロナ禍において模索し歩んだものとほぼ同じものだったのではないかと思います。

オンライン授業は、教員のICT（情報通信技術）スキルの向上が求められました。学校によっては在宅で授業準備や授業そのものをする教員がいて、仕事と家庭のON/OFFもない環境で働く状況も生まれていました。

また、生徒が抱える不安に寄り添うこと、行事や部活が縮小される中で充足感を感じられずにいらだつ生徒たちの心のケアが必要になるなど、子どもも大人もストレスは増大し、揺れ動いた教育現場の姿が分かち合われました。

分かち合いでは「この時代に育つ子どもたちが大人になったときに、『この世代の大人はコロナ禍を経験したから』と言われるような何らかの特徴が見られるかもしれない」という声があったと思います。2020年度は、今日・明日、まずどうしたらよいかと目先のことで追われていたのがどの学校も正直なところで、先のことまでビジョンを持つことが難しかったと言えます。未来を担う子どもたちが、このパンデミックを経験することで気づくミッションがあるだろうと思います。その子どもたちの学びや成長のために、大人がどのように支えていくのか、今後の課題であると感じました。

（鈴木和枝 横浜教区信徒）

特集 「沖縄」からの声

沖縄から伝えたいこと

石川清磨（那覇教区信徒）

コロナウイルスの嵐のまっただ中にある。人類に対して、この嵐が何を言わんとしているかは理解に苦しむ。確かなことは、「過去を反省しなさい」との偉大な自然の反応のような気がする。

沖縄の島々を囲む青い海、白砂のビーチ、エメラルドグリーン珊瑚礁、貴重な動物たちが憩うやんばるの森。沖縄の豊かな自然と文化は、内外の多くの人々の心に癒しを与えてくれる。

しかし、この癒しの陰にある沖縄の持つ悲惨な戦争の足跡は、今なお消えず、深い傷跡を残している。地元の人たちの平和を求め、「防波堤としての軍事基地反対との闘いに対して、沖縄を訪れるどれほどの人が関心を持っているのだろうか。まさに、過去の沖縄の歴史と現実、日本本土防衛の盾としての身代わりとなることでもたらされたものである。戦後の日本の繁栄は、沖縄の苦しみを抜きにしては語ることはできない」。

これは『オキナワの苦難を知る 伝えていこう！平和～沖縄平和学習に向けて読む本』（鳥越一朗著、ユニプラン、2020年12月発行）の、沖縄を訪れる方々や、修学旅行の生徒のための事前学習を目的とした本の冒頭の文章である。

沖縄で生まれ育った私自身も、どれほど沖縄の歴史を知っているのでしょうか。1192（いい国作ろう鎌倉幕府）年はスラッと頭に出てくるものの、「沖縄県の本土復帰は何年？」。果たして、どれだけの私たち、戦後生まれの世代がスラッと答えられるだろうか。

今回は、沖縄県の米軍基地について、また辺野古新基地建設に糸満市の土砂が埋め立てに使用されるということについて、改めて考える機会を与えて貰いました。沖縄県の歴史を改めて勉強するつもりで、沖縄の米軍基地ができた歴

史的背景から探ってみたいと思います。

1945年、太平洋戦争において、沖縄県は「鉄の暴風」と呼ばれるほどの艦砲射撃と地上戦により、焦土と化してしまいました。占領下に、米軍は住民から強制的に土地を取り上げ、新基地を建設しました。太平洋戦争後の朝鮮戦争の勃発という国際情勢も新基地建設に拍車をかけていきました。

日本本土で高度経済成長の兆しがあり、「もはや戦後ではない」とされた風潮があり、日本本土の米軍基地整理縮小が始まったものの、その流れを受けて本土から沖縄県への海兵隊の移転が進んだのです。

現在沖縄県にある米軍基地の規模を並べてみます。本県総面積の8%（東京23区のうち13区を覆ってしまう面積）。31の米軍専用施設。米軍専用施設とは、自衛隊が管理する共用施設とは異なり、もっぱら日米地位協定のもとで管理、運用され国内法が適用されない施設。最近、米軍機の民間地などにおける低空飛行が問題となりましたが、日本の航空法などは当然適用されるはずもなく低空飛行を止めることはできないとのこと。

本土面積の0.6%にすぎない沖縄県に、全国の米軍専用施設面積の約70%が集中。宜野湾市の「世界一危険」ともいわれる米軍普天間基地の周辺には、小学校10校、中学校5校、高等学校4校、大学1校が存在します。

このように、具体的な数字を並べてみたのですが、真に沖縄の実情を伝えることができるのか不安が残ります。

「基地を抱えた沖縄の苦しみを、本土の人間はもっと知るべきだ」。果たして本当に親身になって聞いてくれるだろうか。沖縄の実情を詳しく話したからといって、心に響くのだろうか。実

は、心に響かないのではないだろうか。言葉だけの「同情」でしかないのではないか。人の悩み、苦しみに親身になって寄り添うことができるためには何が必要だろうか。例えば東北の震災に遭われた方々の心に、沖縄の人は親身になって寄り添ったのだろうか。言葉だけの「同情」を並べただけではなかったのではないか。私自身はあの時東北の方々のために何をしたのだろうか。もう一度、自分自身に問い直してみたいと思っています。

正義と平和協議会全国会議でもお話しさせていただきましたが、「ちむぐりさ 菜の花の沖縄日記」という映画を再度紹介させていただきます。映画の主人公は坂本菜の花さん。1999年石川県生まれ。中学卒業後に沖縄県那覇市にあるフリースクール「珊瑚舎スコーレ」に進学。沖縄に行って、沖縄で起こっている問題を解決したい、何か力になりたいと日々あらゆる問題と向き合い、自分自身と日々葛藤しながら生活していく姿をみせてくれる映画です。その中で、名護市辺野古へ通い、地元の漁師さんと話をしたりと、沖縄のために何ができるのかを積極的に模索する姿を見せてくれます。その石川県出身の彼女がたどり着いた結論が、「沖縄に行って、沖縄で起きている問題を解決しようとするのは間違いだった。問題の根元は沖縄にはなかった。日々、自分がいるところに転がっている小さい理不尽に気づき、考え、ぶつかって、悩み、隣に声を広げていかなくは、沖縄で起きていることを止められないと思った。だから、私の中の沖縄はこれからも続く」とあります。

映画の題名は、「ちむぐりさ」です。意味するところは、あなたが悲しいと、私も悲しい。沖縄の方言、ウチナー口（ぐち）には「悲しい」という言葉はないそうです。それに一番近い言葉が「肝（ちむ）ぐりさ」です。誰かの心の痛みを自分の悲しみとして一緒に胸を痛めること。

沖縄戦犠牲者の遺骨が未だに多く残る糸満市の土砂が、辺野古新基地（名護市）建設のための埋め立て工事に使用されようとしています。沖縄戦犠牲者の遺骨を拾い集め、遺族にお返し

する遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」の具志堅隆松さんをはじめ、沖縄県内の宗教者の方々もハンガーストライキをするなど、埋め立てを阻止するために日々行動されています。具志堅さんは「遺骨の埋まった土を掘り起こすことは人道に反する、死者への冒瀆だ」と主張しています。

戦争で犠牲になった方々は声を上げることができません。また、そのご遺族の方々も声を上げることができないのではないかと思います。真に、耐え難い経験をされたご遺族だからこそ記憶を掘り起こすようなことはしたくないのではないのでしょうか。

今回、私自身カトリック信者として生活するにあたって大切なことは、日々の生活の中にある様々な問題を、信者さん同士で、もっと積極的に話し合い、意見を交換していくことだと気づきました。その積み重ねが、自分以外の人たちの悩み、苦しみ、問題に気づかせ、声をかけていくことができるようになるのではないかと思います。

2021年、ウェイン・バーント司教（那覇教区教区長）が示す今年的那覇教区の目標は、「ゆいまーるの心で、あらゆる絆を深めよう」です。那覇教区から毎月発行される機関誌「南の光明」からの抜粋になりますが、ウェイン司教が教える「ゆいまーる」の心とは、「仲の良い、気の合う仲間だけの関係ではなく、いざこざや、いさかいがあっても、近隣の人に対して向き合い受け容れ合う精神」とのことです。世界は一つの村、一つの家族であること、地球が全人類の共通の家であるということをウェイン司教は教えてくださいました。

戦争犠牲者の遺骨は、沖縄本島の南部にだけあるのではなく、焼土と化した島全体が、この遺骨の上にあるのです。平和を象徴するサンゴ礁の海を、軍事基地に置き換えていくことも、偉大な自然は決して許してくれないでしょう。

報告 第7回9条世界宗教者会議 (2021年3月2日、3日オンライン)

辺野古米基地建設問題解決の道

● 鴨下祐一 (日本山妙法寺僧侶)

私は東京に生まれ、育ちました。両親共働きで、経済的には貧しいと感じたことはありませんでした。友だちにも恵まれ寂しいと感じたことは殆どありませんでした。

私と沖縄との初めての出会いは中学一年生で、親戚たちと一緒に海辺のリゾートホテルに泊まりました。細かいことは余り覚えていませんが、初めてスキューバダイビングを経験し感動したことをよく覚えています。二回目は高校生の頃にリゾート気分を味わうために来たことを覚えています。今、思えば不思議なことですが、当時は基地問題の事はいっさい知りもしませんでした。沖縄戦の事すらいっさい頭にありませんでした。

若かったと言ってしまうとそれまでですが、中一だった1996年は、摩文仁に平和の礎が完成した翌年だったり、少女暴行レイプ事件を機に作られた「沖縄に関する特別行動委員会(SACO)」による「普天間基地の辺野古移設」が決定された年でした。

高校を卒業し日本を飛び出した私は、幾つかの国をあてもなく周りインドへと行き着き仏教とマハトマ・ガンディーの非暴力の思想とに出会いました。そして出家してインドで7年間暮らしました。

沖縄には2013年頃から住み始めました。日本に戻ってきた私は社会問題に関心があり、「宗教者九条の和」によるシンポジウムを手伝うために沖縄にやって来ました。2013年は名護市辺野古の工事はまだ始まっていませんでしたが、東村高江の米軍ヘリパッド建設に反対する運動が起きていました。基地の前にテントを張って、住民たちが体を張って工事を止めようとしていました。そして、支援のために県外からも連日多くの人たちが高江に泊まり、なんとか工事を

止めようと協力していました。それぞれ色々なバックグラウンドを持つ人たちが、ひとつの目的のために協力して動く姿にとっても魅力を感じました。と同時に沖縄の歴史を学び、日本がこれまで沖縄に対してどれほど酷い事をしてきたかを知りました。これらの事がきっかけで、沖縄への移住を決断しました。

2014年の7月から辺野古の埋め立て工事が始まり、それに伴って沖縄県民たちも基地の前にテントを張り、工事車両が入らないように阻止行動が始まりました。海上でも工事を阻止するためにカヌーチームと抗議船団が行動を始めました。辺野古の阻止行動はまさに全国そして、各国を巻き込み展開されています。

数年前に沖縄から大学生たちとアメリカ東海岸で行われた平和行進に参加した事がきっかけで、アメリカから6名が辺野古の抗議行動に参加するために来てくれました。その内の4名は約2ヶ月間沖縄に滞在しました。彼らの内の一名の女性に、お兄さんが二人とも兵隊だという人がいました。

一人のお兄さんはPTSDを抱え家族共々苦しんでいると話していました。彼女は抗議行動の中で、「ゴーホーム」や「ゲットアウト」などの声を聞く事に苦しんでいました。彼女は自分で作ったプラカードに「私はあなたを誇りに思う。アメリカに帰っておいで」と書きました。この文章の内容については良くないとする意見もありましたが、彼女の家族関係の事を考えると、彼女の率直な言葉は、彼女の言葉として米兵たちに届けられたら良いと、私は思いました。

彼らが沖縄にいた間、一度だけでしたが名桜大学の学生に手伝ってもらい、構内のパブリックスペースのサクラウム・ウェルカムホームを

使って、アメリカから来た人たちと、アメリカ先住民のオイルパイプライン反対運動の話と、彼らが沖縄の基地反対運動を経験して感じた事を話すというイベントをやりました。先住民の血をひく女性が祈りの儀式をしてくれたり、反対運動の現地で歌われていた「水の歌」を歌ってくれたりしました。大勢ではありませんでしたが学生たちも参加してくれました。一人の学生は、辺野古キャンプ・シュワブ米軍基地内に英語を勉強しに通っていると話していました。基地には否定的な感情は持っていませんでしたが、お兄さん二人がアメリカ兵の女性の抱える悩みやどうして基地に反対するのかという話を聞き、ショックを受けていました。基地に反対する人の、しかもアメリカ人のリアルな声を聞いた事で、彼女の中にも新たな視点が生まれたように思います。

私が住む日本山妙法寺の道場は宜野座村の^{かた}渦^{ぼる}原にあり、辺野古の座り込みが行われている現場から約5kmの距離です。渦原には広い干潟があり、青っぽい色をしたミナミコメツキガニの群れがそこかしこに居ます。干潮になれば渦原から美しい海岸線を歩いて辺野古まで行くことができます。

私が住む宜野座村も村の50%以上が基地で、村の山々には基地であるがゆえに登ることは出来ません。山から降りてくる米軍の水陸両用車が国道を横切り、渦原の干潟から沖に待機する軍艦まで行ったり来たりしています。

座り込みの現場まで約5km、最初の頃は毎日歩いて行っていました。冬場は暗く、山側から聞こえてくる米軍の演習の「タッタッタッタ」という銃音がします。雨期の頃になると、山から大量のカタツムリが出てきて踏まないように気をつけて歩いていてもどうしても踏んでしまい心が痛みます。

辺野古の座り込みは工事車両の搬入に合わせ一日3回行われています。米軍キャンプシュワブの工所用ゲートにトラックや重機が100台、

200台と警察の車に先導されてやって来ます。座り込みをする私たちはゲート前に座りますが、警察機動隊が数人がかりで私たちの手足を持ち上げゲートの脇に移動させます。初めの数年は警察と激しくぶつかり合い、逮捕者や怪我人が出ることもありました。警察は公に暴力行使が許されている組織ですが、暴力を振るわれた方は怒り、その怒りを警察にぶつけました。そして警察官もまた感情を露わにしました。その怒りの連鎖は座り込みの人々を結束させ、県外や海外からも多くの人々が国家権力の被害者である沖縄に支援の手を差し伸べてくれました。最初の数年で結果が出ていれば、私たちは拍手喝采でその勝利を祝っていたことでしょう。しかし、5年、6年と経つうちに徐々に、ゲート前に集まる人数は少なくなっていました。怒りのエネルギーはとても強く人を動かす原動力になりますが、怒りの継続は人を幸せにはしてくれません。また、座り込みの怒りのエネルギーは多くの人々を結集させましたが、同時に一定の人たちの足を遠のかせていました。特に若者たちはその怒りのエネルギーにとっても敏感で、座り込みが重要であることは理解できても、その現場に足を運ぶことが出来なくなっていった様に私は思っています。考え方が違って、人と人が対立し、敵を探し、国と国、地域と地域を分けてしまっただけでは齟齬をきたしてしまいます。

私は沖縄で基地問題に関わるようになって、海外との繋がりも持つようになりました。米軍基地問題を伝えるためにアメリカに行きクリスマスや仏教徒や先住民たちによる平和行進に参加しました。韓国のチェジュ島にも殆ど毎年行き、グランドピースマーチに参加しています。そして、イギリス、ドイツ、ポーランドに行く機会も得ました。何処でもよりよい社会を目指し変革を求めるグループがあり、私の同年代や若い人たちが存在感を見せていました。日本では若者の政治参加、社会運動への参加が少ないと言われていますが、私たちに見えていないだけなのではないでしょうか？

アメリカの平和運動はとても宗教的だと感じました。キリスト教の教会も社会運動に積極的に参加していますし、聖書の言葉を使い人々の心に訴えかけていました。

アメリカ先住民によるオイルパイプライン建設阻止運動では自分たちの信仰、伝統を大切に守り、政府や土地を破壊する企業や警察に対しても祈りを捧げていました。多くの人たちが泊まり込み、テントを張っていたので村のような共同体が生まれ、そこは生活の場となりました。朝は日の出の祈りに始まり、食事を皆で食べ、抗議行動に行く人、キャンプサイトの世話をする人、食事を準備する人、新しい参加者に説明する人、子どもたちを見る人、祈りの場である聖なる火を守る人、と各自が役割を持っていたようです。目の前の問題を解決するには、それだけに取り組んでいても解決できないということを教え、伝えていたようです。目の前で起きている問題は、その問題を生み出している構造や人々の固定された価値観などの変革から取り組まなければいけないと。

そこにはインドのマハトマ・ガンディーの非暴力運動と繋がるものを感じました。ガンディーは独立運動の最中、イギリス人のインド総督から「あなたの運動は政治運動のようでもあり、社会運動のようでもあるが、それとも宗教運動か？」と聞かれた時に「もちろん宗教運動です」と答えたと言います。

表面的に現れる政治問題だけにフォーカスし、自分たちの生活スタイルや固定観念を見つめ直す視点が欠いてしまうと問題は解決できないと思います。大きな目標を掲げてもそのプロセスに暴力性があれば内部から崩壊してしまうという事です。辺野古の阻止行動でも上下関係、ヒエラルキー、立場主義や性差別、様々なハラスメントによって傷つき運動から離れていった人は多くいると想像します。「本当に大事なものは目に見えない」と言いますが、自分たちが抱えている問題というのは、自分たちでは気づくことが出来なくなってしまうということはよく

ある事だと思います。

誰が言うかではなく、何が言われているかが重要であり、全員が自由に発言し、他の人の言葉に耳を傾け、コミュニケーションをフラットにすることによって新しいアイデアや良いものが生まれてくると思うので、そうなって欲しいです。

今日も辺野古のゲート前で、^{あわ}安和、塩川で、そして海上で、阻止行動が展開されています。

しかし、6年が経過した阻止行動は形骸化していて、集まる人も少なくなっています。

私が思うに発想を転換し、「どうやったら工事を止められるかではなく、どうやったら皆が楽しめるか」を追求していく事が、参加者を生き生きさせていくのではないかと考えます。

祈り、赦し、おもいやり、自制心は、全ての宗教に共通する教えであり実践であると思います。

宗教的教えの実践の中にこそ、辺野古問題の解決が見出されるものだと思いますし、あらゆる社会問題にとっても、宗教的な生き方が本当は必要なのだと考えます。

最後に、日本山妙法寺の創設者である藤井日達上人の言葉で終わりたいと思います。

「宗教運動のほかに色々なことをすれば、みんな間違いです。照らす鏡がないでしょう。宗教というのは 仏様とか神様というものを立てます。その教えというものが鏡になります。政治がこちらへ行ったり、こちらへ行ったりする。鏡がないんだ。どちらへも引かれていく。権力獲得とか票集めとか、そんなことになってしまう」。

是非、全国から、また世界各国から沖縄に来てください。美しい海と、美しい山原の森を感じに来てください。ありがとうございました。

南無妙法蓮華經
合掌

(以上は『第7回9条世界宗教者会議資料集』より転載)

とり残された沖縄—「琉球精神衛生法」

山田圭吾（那覇教区信徒）

1964年、第18回東京オリンピック開催。聖火は日本の46都道府県をリレーされた。「ギリシャから沖縄に届けられてから始められた」のような表記もあるが、当時アメリカ軍施政権下にあった沖縄は日本の領土には含まれていないので、いかにも日本復帰前の沖縄に配慮したかのような、そして「全都道府県を巡った」との表現にはかなりの違和感がある。

現在の日本国になったのは1972年5月15日に「沖縄が日本復帰」して以来なのであって、勝手に侵略して併合し、敗戦後は自分たちが助かるために1952年4月28日に「サンフランシスコ平和条約」によって琉球（沖縄、奄美など）諸島や小笠原諸島などをアメリカ軍に差し出して「独立した」と言っている。いかにも自分たちの力で独立したかのように錯覚している日本政府、日本国民は、あえて歴史を、そして現状を無視しているのではないかと思うのだ。「戦後生まれなものですから、歴史を持ち出されたら困ります」と宣ったという菅義偉総理は、同じ時代を生きてきた沖縄の人たちばかりでなく、世界やアジアや日本の歴史を無かったことのできと思っているのだろうか。

自分たちの都合の良いように記録するというのが為政者の常という言葉もあるが、誰も当時を知らない（証明できない）数千年前のことならいざ知らず、今生きている（証言することができる）人たちがいる中でそのような発言をする感覚を疑う。彼らの態度は、沖縄で生き抜いてきた先達たちの声を直接聞いても、現在の沖縄の状況を見ても、おそらく変わらないだろう。この状況を変えるためには政治家を変えなければならない。そのためには自分の身の回りで起こっていることに関心を持ち、見て、聞いて、知って、認識を深め、考え、祈り、そして行動しよう。

さて、前置きが長くなってしまった。以下は



「琉球精神衛生法」下の監置小屋

これらのことを踏まえての話になる。

1900年「精神病患者監護法」ができた。「精神病患者」を「治安維持」のために「私宅監置」せよとのことである。病に関する知識不足からくる不安感、そのことから起こる無理解、偏見が、社会の安寧を乱す恐れがあるとして排除する感覚になり、地域から見えなくするために「座敷牢」や「監置小屋」に隔離したのである。「わが邦十何万の精神病患者は実にこの病を受けたるの不幸の外に、この邦に生まれたるの不幸を重ねるものと言うべし」（1918年、呉秀三）と「二重の不幸」と言われ、精神病患者の置かれた「監置、隔離」状況はあまりにもひどく「精神病患者の救済・保護は実に人道問題にして、我が国目下の急務と謂わざるべからず」と言われしめ、遂に1950年「精神病患者監護法」は廃止され精神衛生法に繋がっていく。

ところが、日本による統治の時代、朝鮮や台湾にもあった精神病院や精神科に関する施設が、沖縄にはまったく設置されておらず、その後のアメリカ軍施政権下にあった時代も、警察に届け行政主席の許可を得て「私宅監置」をする状況は続き、1960年になって「琉球精神衛生法」が公布されたのである。しかし、そのことは「沖縄に生まれたことによる三重の不幸」ではないかとの表現もあるように、戦後の貧しく苦

しい生活、アメリカ軍のやりたい放題の環境の中で「隣のヤギ小屋の方がまだマシだ」、「家畜小屋の方がよほど清潔だ」と言われるほど食事も排泄も生活のすべてがその中に制約される劣悪さ、小屋によっては立つこともできないほどの高さや横になるのもやっとの狭さだった（写真）。出されたときには膝が曲がったままで歩けないほどになるほど数年以上も「監置」され、中には出られたのは亡くなったからというまさに悲惨な当事者の痛み、悲しみ、絶望感は1972年の日本復帰まで続いたのである。

戦後の沖縄における精神病患者は、日本本土の約二倍もの発症率であり、沖縄戦体験の影響があったことが大きな要因と言われている。成長し結婚し、ある程度子育てを終えたころ、ある日突然原因不明の足の痛みで苛まれ、内科、外科その他の診療をしても分からなかったのが、精神科での診療の際「戦地で逃げ惑っていた時、この足で遺体を踏んだ」ことが原因だろうとなり、生活に追われほとんど忘れていた（忘れようとしていた）戦争被害の記憶が、戦闘状態のない平和と言われる時代になってから精神的にも肉体的にも苦しめられ、症状によっては「私宅監置」されてしまう状態にもなったのである。

「私宅監置」に関して、それを定めた国もそれを実行した都道府県にもほとんど資料が残っていないという。幸か不幸か27年間のアメリカ軍統治にあった沖縄に「監置小屋」やいくらかの資料が残っていることで、この歴史を明らかにし、監置された本人（ほとんどは故人）、監置せざるを得なかった家族や地域住民の人権とその尊厳の回復ができればと活動を始めている。

日本ではオリンピックだ、万博だと浮かれ、経済成長で我が世の春を謳歌しようとしていた同時期、沖縄は日本から切り離され凄惨な状況にあったことが忘れられていないか。現にヤンバル（沖縄島北部）に残っている「監置小屋」は日本では私宅監置が廃止された後の1952年に造られ、1964年まで監置されていた人がいたのである。「精神病患者監護法」は「精神病患者を私宅監置することを国が定め実行した」点で、世



映画「夜明け前のうたー消された沖縄の障害者」チラシ

界的に見ても特殊な例だという。日本国が世界に認められ、互いに尊重しあって平和に生きるためには、そのような感性を改めていく努力が求められるだろう。

毎日のミサの中で「思い、言葉、行い」に加えて「怠りの罪」を唱えながらもなかなか実行できない自分の至らなさを思う。その結果、他者に対して、悲しい、悔しい思いをさせているかもしれない。自分に何ができるか。日々の生活の中に数多くの課題があることに気付き、小さなことでもまずは動かなければと思う。

※参考
聖書

『沖縄における精神保健福祉の歩み』（沖縄県精神保健福祉協会、2014年発行）

映画「夜明け前のうたー消された沖縄の障害者」（原義和監督 2021年公開）

日本カトリック正義と平和協議会チャンネル
JP One Point メッセージ「沖縄の私宅監置制度」も
合わせてご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=E5IOBiDzvyM&t=5s>



下関から東アジアの平和という夢を描いて

■ 中井 淳 (下関労働教育センター)

広島教区の地区の一つである山口島根地区では、労働教育センターの前所長である林尚志神父（イエズス会）が地区の行事として長い間、毎年全ての小教区を巡って社会教説の講話をしてきました。私とそのバトンを引き継いで4年が経ちます。今まで分かち合ってきたことを紹介させていただくことで、教区から信徒のグループまで、様々な単位で社会教説に取り組んでいく助けになれば幸いです。

社会教説巡業の一年目のテーマは、一年間の韓国生活から帰ったばかりということもあり、自己紹介も兼ねて、歴史認識と東アジアの平和についてわかちあった。

思い返せば、大学生の時、韓国人の交換留学生と出会ったことで種は撒かれていたのだと思う。当時私は、歴史認識ということに関してとても未熟で、自分自身のアイデンティティも脆弱、国家というものを足掛かりにしているようなところがあり、彼女と歴史の話になるたびに、平行線をたどった。彼女が韓国に帰国し、私の中には「果たして自分は彼女の痛みを本当に理解しようとしたのか」という後悔が残り、韓国に向かった。歴史資料館を訪れ、その時初めて、日本によって傷つけられた側から歴史を見たのだった。私にとっての最初の歴史認識の回心だった。

その後、イエズス会に入会し、司祭に叙階される一年ほど前に林神父の黙想指導を受けた。型破りで、貧しい人、苦しんでいる人々とともに生きてきたその姿に魅力を感じた。「私は何に命をかけていくのだろうか」と問うていた私にとっての答えだった。この生き方に学びたいという思いは届き、下関に派遣された。

下関で平和活動に関わっていくならば、東アジアという文脈に意識が向くのは必然である。1910年に日本は朝鮮半島を植民地化するが、そ

の当時日本に連れて来られた朝鮮半島の人々の多くは、下関を通過して日本の各地に送られた。日本の敗戦によって解放を迎えた朝鮮の人々は祖国に帰ろうと下関まで戻ってきたが、さまざまな事情で帰国を諦めねばならなかった。そのような朝鮮半島の人々の痛みの歴史が国家によって隠されながらも、下関に刻まれている。市民運動の人々にその歴史を教わりながら、市民にその歴史を伝える活動に従事した。

それから社会倫理の勉強のためにアメリカに送られたが、韓国からの留学生たちと親交を深め、後の活動の礎になる体験をさせてもらった。韓国人の牧師夫妻を訪ねてロサンゼルスに行った時のこと。彼らは私をグランデル市に建てられている「平和の少女像」のところへと連れて行ってくれ、共に少女像の前で祈った。その碑の脇には「この平和の碑は、世界中の暴力の被害者に連帯し、世界の平和を願うものです」という趣旨の言葉が刻まれていた。私はその時、少女像が世界中の被害者との連帯という深い思想を持つものであることを知った。

そうして、韓国に渡った私を待っていた一年間は、まさに「自らの傷を持って人々の痛みと共に共感する人々」との出会いであった。そのような心に繋がりながら、歴史の痛みに向き合い、平和を作っていく。それが、日本が明るい未来へと進んでいく道なのだ。そのような思いを胸に釜山からフェリーで下関についた私を船着場で林神父が待っていてくれた。

日本社会は過去に向き合わないまま、植民地主義をそのままに引きずっている。イエス・キリストの十字架と復活を記憶するということは、そのような歴史の中で苦しんできた人々の叫びに耳を澄ませることであり、それを通して他者を抱擁するアイデンティティが育まれていくだろう。キリスト教はその使命を担っている。



地上に投じられた火

■ えなこさいち（生活介護事業所職員）

たとえば駅のエレベーター。今やあってあたりまえのようにも思えます。でも、その設置が実現したのは、いのちをふりしぼって声を上げ闘った人びとがいたからです。

「移動の自由」。行きたいところに行くことができる自由は、だれにでもある権利のはずです。

詳細は割愛させていただきますが、この4月、電動車椅子使用者であるコラムニストの伊是名夏子さんが、無人駅での移動介助をJR東日本に依頼したところ、駅員から「目的地の駅には階段があり、人員が確保できないので案内できない」「手前の駅までなら案内します」という対応を受け、それを「乗車拒否」、移動の自由がさまたげられたと感じて問題視され、声を上げられました。伊是名さんの行動は当然だと思います。自分に置き換えて考えると明らかです。手前の駅では困るのです。ですが、「事前に連絡しないのが悪い」「駅員の負担が大きい」「わがまま」……と、伊是名さんの問題提起には批判の声が多く上がりました。

2016年に施行された「障害者差別解消法」では、いわゆる健常者に求めることのない場所や時間の制限などを障がい者に要求することを禁じています。

JR東日本側はタクシー利用も伊是名さんに提案したようですが、電車移動とは要する費用がまったく異なります。車椅子を使用しているから高額の出費をしなければ移動できないなんて、それもおかしい話です。

かつてに比べれば障がいをもつ人びとを取りまく環境は改善されてきているようにも見えます。しかし、移動の自由をとっていても、障がい当事者が声を上げ、時には文字どおり身体を張って勝ちとってきたものです。悔しいことに、この歴史が顧みられていないようです。

インターネットなどを見ていると、このコロナ禍において、政治への批判も、あの「長期政権」の頃には考えられなかったほど多く見ら

れるようになりました。ですが、同じネット上で、伊是名さんの渾身の訴えには、粗暴で冷たいことばで否定し、蔑み、威圧する。入管法改悪にしてもそうですが、この10年ほどで膨張した日本社会の排他性はまったく変わっていない、むしろ深く根付いてしまったと感じます。

わたしのパートナーは「社会モデルが、いわゆる健常者の成人男性を基準につくられている」と言います。わたしはそこに「日本国籍で」とつけ加えてみます。自分も「下駄を履かせてもらってる」側ということになってしまいますが、日頃、障がいをもつ人、高齢の親、自分の幼い子どもとすごす中で感じる違和感や不合理から合点がいきます。以前にも記しましたが、障がい者の生きづらさ、「障害」は、この社会モデルに甘んじるわたしたちが生み出しているのです。

ルカによる福音書でイエスは、「わたしが来たのは、地上に火を投ずるため」、「地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない……むしろ分裂だ」と語ります（ルカ12・49-51）。

苦しみ、傷つき、尊厳を奪われた人に向き合わないなら、それは平和ではなく、排除によって自分たちだけのためのつくりだした「安定」「安全」という安全圏を「平和」と呼んでいるだけです。

そんな「偽りの平和」に決定的・根本的な変化をもたらす“火”を投じるために来たといエスはみずからを証します。

「その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか」。伊是名さん、そして多くの人びとが、かつて今も深い苦しみや悲しみの中から、声をふりしぼり“火”を投じています。わたしたちには熱く、痛みを覚えるその火にこそ、いのちの注いでくださったかたの思いを感じるのです。

1 報告 2021年正義と平和全国会議「コロナの時代と教会」
(2021年3月19日、20日オンライン)

特集 「沖縄」からの声

3 沖縄から伝えたいこと 石川清麿

5 第7回9条世界宗教者会議 (2021年3月2日、3日オンライン)
辺野古米基地建設問題解決の道 鴨下祐一

8 とり残された沖縄―「琉球精神衛生法」 山田圭吾
(新連載)

10 カトリック社会教説 一步一步
下関から東アジアの平和という夢を描いて 中井 淳

11 (連載第11回) シロツメクサの花かんむり
地上に投げられた火 えなこさいち

12 苦虫のつぶやき 中川克史
まんが「修練者の石橋さん」

表紙写真 4月21日、衆議院第一議員会館大会議室にて、「沖縄から北上田毅さん・具志堅高松さんを迎え政府交渉&院内集会」が行われました。画面中央は、沖縄戦戦没者の遺骨収集を長く行っているボランティアグループの具志堅高松さん。「戦没者の遺骨が含まれている土砂を辺野古新基地建設に使わせてなりません」横断幕を持つのは、「平和をつくり出す宗教者ネット」からの参加者。



苦虫のつぶやき

人々の傍らに立つイエス

「私は戦後生まれなので、沖縄の置かれてきた歴史については分からない。日米合意が私の全てだ」。2015年4月、官房長官として沖縄を訪問した菅義偉首相が当時の県知事翁長雄志氏（故人）との会談で発したという。「日米合意」とは1996年4月、日米両政府が合意した米軍普天間飛行場の返還。翁長氏は、返還の前提とされた代替施設（新基地）の建設反対を掲げて前年の知事選に当選していたが、この会談で沖縄の歴史、民情から説き起こし名護市辺野古での新基地建設の断念を求めた。それに対する菅氏の反応が冒頭発言だ。この一言をもって菅氏に首相の資格なしと断言できる。まともな歴史観を持つともせず人の意見に耳を傾けない姿勢が今のコロナ禍にも繋がっているように思える。沖縄の日本の苦難が続く。

国が辺野古埋め立ての申請をした2013年3月から埋め立て承認を取り消した翁長知事に対する訴訟を国が提起した15年11月までは、私が通信社的那覇支局に勤務した時期とちょうど重なる。辺野古で、高江で、伊江島で、そしてあちこちで強欲で強権的な支配に声を上げる人々に接した。その傍らに立つイエスの横顔や後ろ姿を見たような気がするの、あながち錯覚ではないと思っている。コロナ下なかなか訪問もかなわず沖縄言葉でいう「わじわじ（「いらいら」に近いかな）」しているこの頃。インチキ政治家のように「寄り添う」なんて言葉は使いたくないが、現役を離れたこれからも「島嶼防衛」などの語の裏に潜む危うさ、まやかさを疑っていきたい。 中川克史（横浜教区磯子教会信徒、日本カトリック正義と平和協議会委員）

編集後記

4月24日、沖縄戦戦没者遺骨収集活動についての具志堅高松さんの講演会が都内で行われ、参加した。ある時、遺骨収集事業を那覇市内のホームレスの人たちの雇用支援に結び、作業をお願いすることがあったそうだ。ホームレスの人たちはみな、炎天下のなか食事忘れ、熱心に遺骨収集に取り組まれたそうだ。土中で脆く壊れやすくなった遺骨を慎重に扱うために、自分なりに道具の工夫をされるなどということもあったそうだ。そして、さまざまな失敗を重ねて生きること絶望し、死のうと思って沖縄にやってきたある人が、この作業を通して生きることの意味を、文字通り、土の中から掘り起こし、故郷に帰る決心をしたのだという。(h)



発行日 2021年6月1日 (隔月発行)
編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,800円 (送料共)
郵便振替 00190-8-100347
加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>